

2020年3月18日(水)

老球の細道531号

## 無観客試合と応援

会津バスケットボール協会 室井 富仁

大相撲のみならずバスケットボールのBリーグもとうとう無観客試合を強いられるようになってしまった。先日大相撲とBリーグの無観客試合をテレビやマイナビで観戦した。

大相撲では轟頂の炎鵬と豊山の取り組みはすごかった。まるでプロレスのような戦い方だったが、もし観客がいたら物凄く会場が盛り上がったことだろう。行司の声「のこった！のこった！観戦チケットが残った！」ばかりが聞こえ寂しい限りであった。一方、バスケットボールBリーグのほうは、地元の福島ファイヤーボンズ対仙台のゲームだった。この日はボンズのホームゲームで東地区1位の仙台を破る大金星をあげた。もし観客が観戦していたら郡山体育館が大いに盛り上がり、コロナも縮み上がったにちがいない。

それにしても、応援者や観戦者のいないところで試合をするということは何だかむなしなことだろう。特にプロフェッショナルにとってはモチベーションを上げるのに容易ではないだろう。私も現役選手時代には応援、観戦者がいることでどれだけ燃えたかわからない。思い出に残っているのは初恋の人が応援に来てくれた代々木第2体育館でのインカレ(全日本学生選手権)、教員チーム時代に教え子たちの応援する前での試合、教員退職時の最後の百井杯で教え子や保護者の前での試合等。我歴史に残る思い出ボロボロである。

ところで、ほとんどすべてのスポーツ・イベントには応援団が存在する。バスケットボールやアメリカンフットボールにはチア・ガールが登場し、チームで組織だった掛け声や踊りで応援し、ゲームを盛り上げる。同じアメリカのスポーツでも、野球ではチア・ガールは登場せず花の応援団が存在する。高校野球においては、どんなに猛暑の中でも学ランと称する黒の学生服を着て応援する。サッカーにおいては、Jリーグの発足から「サポーター」という応援団が存在する。サッカーの試合中に、太鼓に合わせて歌い、踊り、声をそろえて叫ぶ姿は旧来の応援団と変わらないが、サポーターはサッカー選手や経営者と同格に位置づけられているという。クラブの株を取得している人もいるからだそう。なかにはヨーロッパなどでは「フーリガン」と呼ばれる騒動を起こすことを目的とする応援集団も存在する。

なぜか、大相撲には応援団は存在しない。応援は個人個人が勝手に「ハクホー！」「エンホー！」などと、掛け声をかけているようだ。最近気になるのは土俵際の升席と言われる場所に着物の美人女将風の女の人たちが応援していることだ。女性を上がらせない神聖な場所に美人がたくさん応援に来ていいものかと余計な心配をしてひんしゆくを買っている。

Bリーグの試合現場にいと始終応援の声や音楽などが会場に鳴り響く。時折騒音に感じる時がある。タイムアウトの時などはコーチの指示が届くのか他人事ながら心配していた。ゲームが止まった時、隣の人とプレーや戦術について感想を述べあうことはゲーム観戦の醍醐味である。今回の無観客試合の現場にいたらそんな醍醐味を味わえたかもしれない。